

「耐える能力」と人類

～「ネガティブ・ケイパビリティ」について～

シンキング・バース

日本語研究班

一変した年始に
光明を見出すためには

■ 年前の2020年は、「新型コロナウィルス」ということばを知らない年始を迎えていました。北国の冬としては珍しく、雪のない穏やかな正月で、夏場に控えた東京オリンピックの盛り上がりを予想し、その後の反動を推測する新年を迎えていた気がします。

打って変わり2021年の年明けは、ご承知の通り「コロナ (COVID)」ということばに、世界中が怯える状況で始まりました。また、ボクが暮らす街は、数年に一度の寒波の影響で、年末から大雪に見舞われ、連日の除雪に追われています。日常の感覚は、昨年とは一変した感が否めません。

●底層の「自然」への眼差し

昨 年の年頭に何を書いていたかを紐解いてみると、未完のまま未公開の一文に目が留まりました。精神医学用語の一つ「ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)」について書こうとした一文でした。

そのことばは、19世紀のイギリスの詩人ジョン・キーツ (John Keats 1795 - 1821) が、シェークスピアを評して使ったことばとされています。キーツはシェークスピアを、並外れて優れた「ネガティブ・ケイパビリティ」の持ち主として評価したとされ

ています。しかし、そのことばは、誰にも顧みられないまま、埋もれてしまいました。注目され始めたのは、第二次世界大戦後、精神医学の分野においてでした。



「ネガティブ・ケイパビリティ」は、直訳すれば「負の能力」です。作家で精神科医の帯木蓬生氏は、「答えの出ない事態に耐える力」と副題をつけ、その能力についての本を出しています。

ボクがこのことばに接したのは、パーキンソン病 (Parkinson's disease) の治療に携わる医師たちの講演集のため、講演音声を起こす仕事をしたのがきっかけでした。ある医師が、パーキンソン病の治療には、「答えを出さない力」が求められるのではないかと、注目していたのです。

2021年は、パンデミックの終息が見えない中で、耐乏生活下で始まりました。仮に年内に終息の報に接したとしても、アルベール・カミュ (Albert Camus 1913-60) が『ペスト (La peste)』の結末で描いたように、感染症の脅威から解放されて喚起に沸く市民たちの底層で、ウィルスは存在し続けます。「ウィルスとの戦い」は、ほぼ永遠に続くのです。あの東日本大震災から10年という節目の年ですが、いつかどこかで発生する巨大地震と同じように、底層のウィルス (自然) は不滅で、人々の日常と共に命脈を保って行く気がします。

(2021年1月7日)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
「耐える能力」と人類

2021年1月7日（初版）発行

著 者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。